

校名：滋賀大学教育学部附属特別支援学校

所在地：〒520-0002 滋賀県大津市際川3丁目9-1 電話番号：077-522-6569

記載日：平成28年4月25日

記載者：井上 照美

記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

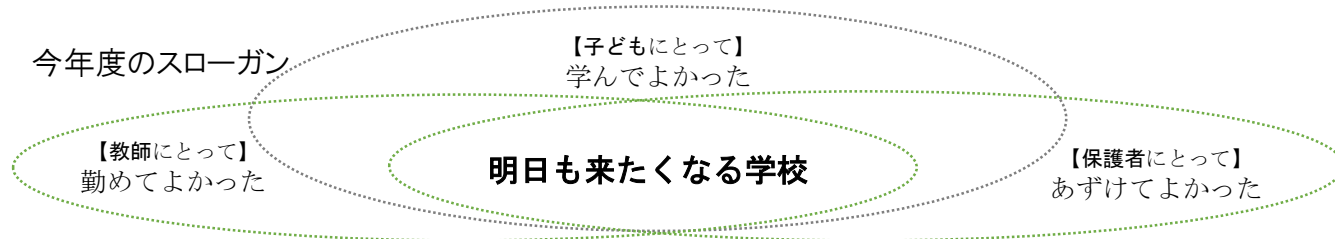
本校は、知的障害対象の小規模（小15名、中16名、高22名 計53名が在籍）の特別支援学校で、背に比叡山、前に琵琶湖の閑静な住宅地の中、地域の保・幼・小・中の各校園と隣接する文教ゾーンにある。

教育目標

「生きぬく力をめざして」

- たしかに 見通しがたしかにもてる子（毎日の生活の積み重ねの中で）
- まろやかに 人を思いやるまろやかな子（仲間とのふれあいの中で）
- たくましく 心もからだもたくましい子（心とからだのリズムを整えて）

今年度のスローガン



貴校の卒業生の活躍状況について：

- ① 「追跡調査」としては実施していないが、本校の特長の一つである「青年学級」がその役割を果たしていると言える。昭和54年高等部新設以来、現在までに卒業した計35期生が母校（本校）に来て集う「青年学級」を毎月実施しており、そこには、卒業生総計約300名のうち、約50名が毎月集っている。1月には「成人を祝う会」を行い、関わった教員も参加し温かみ溢れた場になっている。
- ② そのため、まとめてはいないが、だれがどこで働いているかはほぼ分かる状態である。その情報は、学校が把握している。
- ③ 卒業生保護者の会「びわの会」が中心となり、職場で継続して働いている卒業生を「10年勤続表彰」「20年勤続表彰」として、毎年、それぞれ8名～10名を表彰してくださっている。中には、県知的障害者の大会でその勤労状況が認められ「県知事賞」を受賞した者もいる。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

- ① 「追跡調査」としてはしていない。
- ② 本校の研究発表大会当日に行う恒例のOB会では、親交を深め近況を確かめ合っている。
- ③ 勤務校において特別支援教育コーディネーターや通級指導教室の担当をするなど、特別支援教育推進の核として活躍したり、市や県の教育委員会、発達支援センター、県総合教育センターなどにおいて、その専門性を発揮したりしている者がほとんどである。研修会講師として招聘されることもよくある。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなど

1 伝統的に積み上げてきた教育活動

《本校の各教科等を合わせた指導》

【小学部】

「自分一人でもがんばれる、みんなともがんばれる」を大切に、全面発達の基礎づくりに力を注いでいる。特に人としての基本動作である「歩くこと」に焦点をあてた「歩け歩け」の活動は、昭和56年に始まり、郷土の山（比叡山）や琵琶湖周辺等を活動コースとし、月一回程度の割合で実施している。子どもたちは「歩くこと」を通して自然の厳しきや優しさに触れ、足腰を鍛え、丈夫な身体や最後まで歩き抜く粘り強さを育てている。学期に1回の「歩け歩け本番」に向けた「ミニ歩け」を計画的に仕組みながら、年間通したスパンの中で展開している大単元の学習である。また、昨年度からは、その基礎作りとしての毎日のラジオ体操に、地域の方が関わってくださるようになった。



【中学部】

生活単元学習では、生活上の課題に向かう意欲を引き出し生活の広がりや充実を目指すことをねらいとし、「社会人として生活するための基礎的能力を養うこと」をめざして「仲間づくり」を重視した取り組みを行っている。学部全体で取り組む「中学部フェスティバル」とクラスごとに取り組む「クラスタイム」では、仲間と一緒に力を合わせて取り組むことの楽しさや達成感、そして日頃の教科学習では修得しがたい経験が、大切な要素であると考えている。



生徒自身が持っている興味・関心から体験等の機会を積極的に仕組むように努め、生徒自身が主体的・創造的に活動に取り組む中で、楽しみを見つけ、成就感を持たせることができるようにします。生徒たち自身が自分の思いを出し、計画・調べ・実施・まとめという一連の活動を通し、「楽しかった」「もっとしたい」などの思いが膨らむことを大切に取り組んでいる。



【高等部】

「一人ひとりのよりよい社会自立をめざすこと」を合言葉に、職業教育や現場実習など、常に卒業後の社会生活を意識した取り組みを進めている。職業教育では、働くことの意義を理解すると共に、職業生活に必要な能力を高め実践的な知識、技能、態度を育てるためそれぞれの工房で汗している。また、総合的な学習の時間では、自らの生活や生き方を考えることをねらいとし、スポーツやレクリエーション等の活動に取組み、京都や大阪の附属特別支援学校とソフトボール、フットサルの交流試合を行っている。



<職業>

勤労の意義について理解するとともに、職業生活に必要な能力を高め、実践的な態度を育てることを目標として、スピカ、デネブ、ベガの3つの工房に分かれて学習をしている。

【スピカ工房】

- ・一般就労や就労継続A型事業所等を進路として想定し、それに必要な知識、技能、態度を身につけることを目指している。
- ・職場見学や様々な仕事を体験し、座学によりそのまとめを行う。個別の課題を明らかにし、将来の就労についてイメージを持たせる。
- ・集団で取り組む就労体験実習として滋賀大学や近隣の福祉施設での清掃業務等を中心に取り組む。

【デネブ工房】

- ・就労移行型事業所及び、自立訓練施設等を進路として想定し、それに必要な知識、技能、態度を身につけることを目指している。
- ・附属幼稚園、聖パウロ幼稚園との交流（芋掘り、アルミ缶リサイクル）に取り組む。
- ・陶工や織物の作業学習に主に取り組む。

【ベガ工房】

- ・生活介護型事業所等の利用等を進路として想定し、それに必要な知識、技能、態度を身につけることを目指している。
- ・自立活動と連動した指導を行う。

※ 産業現場等における実習

- ・1年生より個々の実態、課題に応じた場所で現場実習を行っている。2年生後期より進路を考慮したより実践的な現場実習を行い、3年前期に進路を決定していく。

《地域との連携・交流》

自衛隊滑走路の跡地に建設された本校は、地域の保育園・幼稚園・小学校・中学校と隣接している。そのため、附属幼小中校園との交流及び共同学習とは別に、地域の校園との交流及び共同学習を、互いの求めに応じて進めている。交流本番だけでなく、事前事後学習を丁寧にするにより効果的な活動になるようにしている。

小学部 ・地域の小学校の特別支援学級とお餅つき交流・ラジオ体操を通して地域の方と交流

中学部 ・地域の幼稚園と音楽を通じた交流・地域中学校特別支援学級を招いての劇発表

高等部 ・地域の保育園児に木製玩具を制作・提供することを通じた交流
・附属四校園が行うPTA主催の「四校園まつり」には、高等部作業班がバザーに出店。

2 新規事業（時代の変化の要請に対応した教育活動）

- (1) 発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期・継続支援研究事業（発達障害早期支援研究事業）
〔文部科学省委託事業〕
- (2) 特別支援学校高等部におけるICTを活用した国際交流学習（職業科で作成した陶工や美術作品を通して行う台湾の高等学校の特別支援学級との国際交流事業）〔パナソニック教育財団の研究助成〕
- (3) 主権者教育（生徒会選挙の機会を利用して、本物の投票箱や記載台を使った模擬選挙）

《公立学校への還元》

(1) <研究発表大会>

公立諸学校に先駆けた先進的な研究を心がけ、2年に1度開催している研究発表大会には県内校園から多くの教員が来られ、本校での実践に学んでいただく機会となっている。

(2) <実践ワークショップ>

特別支援教育に関わる諸課題について本校教員から話題を提供することを基本とし、県内の特別支援教育に携わる先生方とともに語り合う場として夏季休業中に実施している。県内保幼小中の幅広い校園からの参加があり、好評を得ている。

(3) <学習・発達支援室>

滋賀大学との共同研究をベースに、特別支援教育に携わる教員のために平成17年4月に本校内に新設された相談ルームで、滋賀大学内に設置されている「地域教育支援室」との連携によって、本校教員と大学教員等を学校園に派遣し、現場の教育的ニーズに応える体制を整えている。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか

- (1) 知的障害にかかる特別支援教育の専門的・先進的な学校として、地域をリードする存在である。知的障害教育課程の生活単元学習は、特に実践の積み上げがあるので、県内小中学校の特別支援学級のモデルとなっている。
- (2) 公立学校に戻った時に、本校勤務時代に培った専門性を生かして活躍できるよう、人材育成をする場である。特に、小学校・中学校・特別支援学校籍からの異動であるため、日常的に具体的実践の中で校種間交流ができ、見識を広げる場にもなっている。
- (3) 現代的課題である特別支援教育について、県内の校園からの相談依頼を受けて、巡回相談等によりサポートしていくべき立場である。
- (4) 将来教員となる学生を育成する実習校として、県内の学校から期待されている。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について

- (1) 質の高い教育実習（教育実習受け入れ校としての責任）
教員の質の維持向上を図るために、質の高い教育実習が実践できるようにしている。
 - ・教育実習を行う3回生になってからではなく、その前に、大学2回生の学生に向けた学習指導案の書き方等の研修を行うなど、丁寧な教育実習を行っている。
- (2) 特別支援学校免許取得ができる附属校としての役割
特別支援学校や特別支援学級の担当教員の特別支援学校免許の取得率の向上が叫ばれている中、大学と連携して実習できる数少ない学校である。
- (3) 大学との共同研究を進める実践研究校としての役割
- (4) 伝統的な教育活動とともに、時代の変化の要請に対応した先進的な実践を発信する役割